対談

エル・システマとスズキ・メソードを考える

ベネズエラで画期的な成功を得た社会教育システム「エル・システマ」を推進するエル・システマジャパンが誕生しました。菊川穣（きくがわ ゆたか）代表理事をお招きし、本誌発行人の紿田（たいだ）英哉・本会常務理事との対談が実現しました。

米国の関係者と実施した、夏の相馬エル・システマ研修ワークショップの様子。中村第一小学校器楽部と、すべての関係者が合唱で参加した「展覧会の絵」の演奏風景。トロンボーン奏者の後方に指揮者として活躍された、故バーンスタインさんの娘のジェイミーさんも参加されていた

エル・システマとの出会い

紿田　私自身のエル・システマとの最初の接点は、２００８年12月のドゥダメル率いるシモン・ボリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラの東京公演でした。その後もエル・システマが世界に広がり、今回、菊川さんの努力で日本でもエル・システマジャパンができたことを心強く思っています。まず、ご自身の関わりからお話しいただけますか？

菊川　小さい頃にピアノを習い、高校時代は吹奏楽に夢中になり、サックスを吹き、指揮者もしておりました。イギリスの大学と大学院で学び、教育分野と開発途上国に関心がありました。卒業後、東京のシンクタンク勤務を経て、ユネスコやユニセフに所属してアフリカに9年弱いました。南アフリカでは、人種差別のアパルトヘイトがあった時代に、伝統的なアフリカの合唱が、人々のよりどころになっていることに興味を持ちました。いわば音楽の力です。08年に帰国し、私もドゥダメルの指揮を動画サイトで見て「これはすごいな」と。クラシックのジャンルを超えて、普遍的で全人類的な恍惚感を得ました。すぐにエル・システマのことを調べてみましたが、この時点では「すごい」という範囲にすぎません。

日本でユニセフの仕事をしていて、3月11日の東日本大震災を経験。緊急支援本部チーフコーディネーターとして関わる中で、被災地の皆さんに何が本当に寄り添ってできることなのか、いつも考えていました。その時に、ベルリン・フィルの日本公演がありました。ベルリン・フィルはユニセフの親善大使でもあり、日頃から社会貢献をモットーにしている団体です。被災地に行って演奏したい、サントリーホールでの公演にも被災地から招待したいというありがたい話があって、私も関わることになりました。仙台で木管五重奏を演奏することになり、スコットランド出身のホルン奏者、ファーガス・マクウィリアムさんから「東北こそエル・システマが必要でないか」と突然に提案され、驚きました。エル・システマとベルリン・フィルが、すでに10年以上の付き合いがあること。ファーガスさんは、アブレウ博士（※）がベルリンに最初に来た頃から関わっていた一人で、それからは毎年のようにベネズエラに行き、金管パートの指導をされて来たこと。逆にエル・システマに感化され、母国スコットランドで08年にできたシステマ・スコットランドに、発足時から理事として関わっていたことを知りました。重要だと思ったのは、ベネズエラのエル・システマを日本にいきなり持って来ても、日本にはスラムがあるわけではありません。ドラッグの問題、犯罪しかり。でも彼は「スコットランドでやっているのだから、日本でもできる」と言いました。スコットランドの地方都市も、少子高齢化、経済が傾いてきている状況は日本に似ています。「なるほど」と思い、背中を押されました。

現地で発酵するのを待つ

紿田　面白い動きです。でも、それまでのユニセフの仕事を投げうち、のめり込むようになるのは、もう一段階、決断するに至る理由があったのではないですか？

菊川　ええ、エル・システマで何が大切かと考えた時に、コミュニティを作っていくことでした。今やエル・システマはベネズエラの国家プロジェクトですが、アブレウ博士が始めた時は、彼の情熱と彼を支える人たちの熱意に、周りの人が賛同して広まったのです。スコットランドでも、あくまでも地域の人が地域でできる仕組みを作っています。援助があっても、時間をかけ、地域の人たちが自分たちで作る。それを聞いて、被災地のいろいろなところで活動してきた中で、相馬の人たちのことを思い出しました。「相馬ならできる」と。

「援助慣れ」が日常的になると「もらえるものはもらっておく」ということがアフリカではよくありました。東北でも、あからさまにそういう気持ちを話す自治体の人がいる中で、相馬の人たちは、「支援は受け付けますが、私たちがお願いしたものだけでいい」と武士道に通じる矜持（きょうじ）を持っていました。それで11年12月、今も忘れませんが、日曜日の夕方、暖房も入っていない相馬市教育委員会に行きました。クラシック音楽を支える会「相馬夢工房」の人たちが集まっていました。メンバーの一人でフルートを吹かれる農林水産課長（当時）が、エル・システマのドキュメンタリー番組をご存知でした。一方で、ユニセフが呼んだイタリアのプロカメラマンのワークショップを教育委員会の主導で開いた時に、指導主事の美術の先生が、一流のものに触れることによって、たった3日間で子どもたち

※エル・システマ全体の生みの親。

給田英哉　Hideya Taida
才能教育研究会 常務理事

が変わったことにショックを受けていました。子どもたちの伸びる力を目の当たりにして、音楽の分野でも同じかもしれないと思われたのです。その先生たちが、「やりたい」と言ってくださいました。

給田　菊川さんが直接「やりましょう」と言われたのですか？

菊川　私自身、関西出身なので、がんがんいくタイプですが、東北の人たちにあまり言うと、引かれてしまうと感じていました。でも、相馬の市長さんが、やり手でいろいろなところに発信して行動力のある方なので、「直接お話ししましょうか」と申し上げたら、「逆にこれが市長の耳に入ると、すぐにでもやれ、とトップダウンになる。今、行政の立て直しで大変で、中途半端になるかもしれない。だから教育委員会として、これを進めるための時間がほしい」と言うのです。年が明けて再度伺うと、さらに輪が広がり、お寺のご住職もいました。そして2月末には、教育長名で市内の学校に説明会の開催通知が出て、これはできるかなと思いました。

決定的だったのは、ベルリン・フィルが27年関わってきているチャリティコンサートの主催者に、ファーガスさんが、次年度のコンサート計画として「福島があるよ」と情報提供したことです。コンサートの主催者から「勝手に12年9月のチャリティコンサートを、相馬にできる子どもオーケストラの支援に決めたから」と連絡がありました。慌てて「がんばります」と応えましたが、相馬ではまだ何も決まっていません。向こうは1週間後にプレスリリースを出すので、こちらも大急ぎで資料を作りました。もう、やるしかない、と。

給田　とても興味深いお話です。一つは、菊川さんが音楽の力をよく知っていること。しかもアフリカでの援助をキャリアとして持ち、「援助慣れ」も見聞してきたこと。そして、現場の意識が熟成するのを待つ。その時間が、考えていた以上に短い時間で動いた、それがすごい。

菊川　本当に、そう思います。

給田　ベルリン・フィルとの関係、そしてベネズエラ発ではなく、スコットランドなら日本での共通項があると閃(ひらめ)いたこと、震災は辛いことですが、震災がなければ菊川さんも東北には行かない。人の輪、タイミング、物事が実ってゆく一つの典型的なケースだったと思います。

サポーターに徹する

給田　菊川さんは「カタリスト」（※）ですね。菊川さんがいらっしゃらないと何も成り立たない。しかし、菊川さんだけでもできない。いろいろな人が、菊川さんを通じてつながり、相馬が動き始めた。それだけなら、菊川さんは相馬プロジェクトのプロデューサーですが、さらにエル・システマジャパンを立ち上げます。それはどういう発想でしたか？

菊川　日本ではまだまだエル・システマは知られていません。エル・システマ自体を普及させ、人を育てるには、エル・システマの組織を日本に作ることでした。システマ・スコットランドは、スターリングという地方都市に事務所がありますから、相馬に事務所を設けるのがベストと思いました。ただ、私が相馬にどっぷり浸(つ)かると、活動はしやすいですが、意図していることができないかもしれません。そこで、もともとあった日本ベネズエラ友好協会を発展的に解消し、一般社団法人になることが3月23日に決まりました。まだその時点では、相馬がどうなるかは決まっていませんが、こだわったのはエル・システマジャパンが相馬プロジェクトをやるのではなく、相馬プロジェクトをやっている人たちをエル・システマジャパンが応援する形を作りたかったのです。

震災と原発事故があって、教育委員会としては、何かやらないといけない、という思いが切実でした。ただでさえ子どもの数が減っている中で、原発事故で県外への流出も起きています。それで5月7日に相馬市とエル・システマジャパンが協定書を交わすことになります。

給田　この相馬プロジェクトは、意識があり行動力のある人と、応援する体制があって実現しました。しかも、エル・システマジャパンがイニシアチブを取るのではなく、サポーターに徹する。そうでないと、「おんぶにだっこ」になります。他にも同じ気持ちで動いてくださる教育委員会が、モデルケースにして欲しいですね。

菊川　モデルケースだからこそ、誰でもできる普遍性のある仕組みにしたいですね。「エル・システマが民間の音楽教室を運営して、場所とお金、人を連れてくれれば好きなようにできるのでは」とよく言われます。でもそれは東京や大阪のような大都市なら できることで、相馬のような地方都市で、できる仕組みを考えないといけません。

給田　想像を絶するような深刻な状況の中に追い込まれた東北で、子どもたちに夢を与えないといけない。大規模なことはできないけれど、大人たちがエル・システマを導入することで、子どもたちに夢を与えられる。その仕組みが小さいから、早く動ける。

スズキの教え

給田　スズキの立場から見ると、エル・システマがスタートするきっかけは、アブレウ博士がウィリアム・スター先生や小林武史さんを迎え入れ、スズキに大いなる関心を持ってくださったことですが、その頃のスズキは、まだ大きくはありませんでした。でも本当にいいものを聴かせると感動の深さが違うこと、与える以上は、いい加減なものではだめという真理も伝わりました。私自身、鈴木鎮一先生から「いい音楽を聴きなさい。自分の心が豊かになる」と口が酸っぱくなるほど聞かされました。宝石の鑑定士に、いい宝石を見せることで目が肥えるのと同じです。

※触媒。変化のきっかけを与える人

菊川 穣　Yutaka Kikugawa
エル・システマジャパン代表理事

菊川　本当に、そうですね。エル・システマにもいくつかのキーワードがありますが「どんなに貧しくても一流のものを」とアブレウ博士も言っています。

紿田　同感です。スズキ・メソードをなぜアブレウ博士がベースにしたかと考えますと、スズキがいい加減なものだったら、博士は取り上げなかったでしょう。

　重要なのは、教育は短期間ではできないということです。教える人、与える人としてクォリティの高い先生が必要です。スズキは、音楽家を育てる教育ではなく、いかに子どもの能力を伸ばすかという視点で活動しています。単なる音楽の先生と違い、源は人間教育にある。その子どもの能力を高める視点から、スズキの指導者は訓練されています。これからのエル・システマを発展させるために、間違いなく彼らはエル・システマと連携できるはずです。世界全体でスズキ・メソードの指導者は約1万人ですが、その3分の2以上はアメリカにいます。これはアメリカがスズキ・メソードの指導者をシステマチックに育てていることを物語っています。

菊川　アメリカ人の得意とするところですね。エル・システムも同じです。

スズキ・メソードとエル・システマのコラボレーション

紿田　ところが日本は家元制度と同じで、なかなか広がらない。しかも都心部には多くの教室があるけれど、地方には本当に少ない。いい指導者をどれだけ準備できるか、教育のインフラが課題です。今後、共通目的である子どもたちの能力を高めるために、エル・システマにはスズキを利用して欲しいですね。その意味では、3月のスズキ・メソード世界大会でも、相馬プロジェクトがどのように動いているか伝えて欲しいし、世界のエル・システマの動きと日本の動きを教えて欲しいと思っています。

菊川　ありがたいお話です。震災2周年を目前に控えた、13年2月24日にはエル・システマを始めた相馬の小学校が集まってコンサートを開く予定です。合唱や器楽合奏の成果発表の場になります。それと、6年生の子どもたちが中学生になっても続けられる環境を提供したいと思います。

紿田　スズキの子どもたちが使わなくなった楽器を寄付する協力も考えられます。一方で、震災に対して世界中のスズキファミリーから大変なお金が集まり、東北のスズキの教室を助けたり、被災地支援をしてきましたが、相馬プロジェクトにもスズキの教室を作り、指導者を派遣するなど、いろいろなことが考えられます。スズキとエル・システマの関係が過去の話でなく、現在も生きていて、将来にも繋がる巡り合わせにしたいですね。

菊川　ありがたいお話です。来週には、市内の八幡小学校でヴァイオリン教室が始まりますし、音楽の授業での取り組みも展開していくことになります。9月のTBCこども音楽コンクール福島県大会では、中村第一小学校が20年ぶりに代表になり、東北大会に出場しました。演奏も感動的でしたが、何よりも親御さんたちの涙に感動しました。震災後、たくさんの涙を流されたと思いますが、子どもたちが変わることのインパクト、周りの大人を巻き込んでいく力を痛感しました。子どもたちの伸び方は本当にすごいです。中村第一小学校は器楽部

27人中、10人が初心者ですが、ホルストの「セントポール組曲」を見事に演奏しました。挫折しそうになった子どもたちもあると思いますが、「自分たちが、ここにいることが嬉しい」と3年生の子が言いました。もう音楽が宝物になっています。

紿田　スズキでもグランドコンサートで、初級の子どもたちが最後にステージで「キラキラ星変奏曲」を演奏します。本人の意欲作りに大変大きな効果があります。

菊川　エル・システマでも、まったくそうですね。アブレウ博士も「初心者を舞台に出すことで、大きく変わることができる」と話しています。

紿田　みんなから拍手され、スポットライトを浴びる。褒めることも重要ですし、上手な人と一緒に演奏できることで、自分がうまくなったような気がします。

菊川　試験や発表会で100％の実力を発揮することは難しいですが、音楽の舞台に出ることの緊張感を味わえ、しかも、それを皆が喜んでくれることは他に替えがたい喜びです。教育委員会の指導主事が「これは、キャリア教育の一環としてやっています」と話されました。さらには、「内発的動機づけになる」とも。震災後に教育者として最終的に子どもたちに何を身につけさせたいかと考えた時に、やはり内なる動機づけだったのです。それがあれば、いろいろな場面でがんばれるのではないかと。

紿田　厳しい環境の中で、将来に実りある問題意識を持つ人を得られた。

菊川　まさにそうです。プロジェクトが簡単にできたと思われたくありませんが、現地の人々が実現するまでに、ものすごく動かれました。そして上の方が動きました。

紿田　とってもいいお話だと思うのは、トップダウンにもっていくのでなく、発酵する時間、ふつふつと煮詰める時間を持たれたところです。

菊川　リーダーシップ論が取り沙汰されますが、個人的には違うと思います。日本の場合、リーダーがすべてを決めることはなく、いろいろな部分がある中で緻密さが求められます。それを無視すると、結局回らなくなります。

紿田　今度の世界大会には、アブレウ博士の右腕として、エル・システマに深く関わられたディ・ポロさんがシンポジウムに登場されます。それをベネズエラ大使館の石川大使（※）がサポートしてくださいます。

菊川　石川大使がお話を繋いでくださったフジテレビが、相馬の活動について長期の取材をして、ドキュメンタリーを作っているところです。

紿田　ディ・ポロさんに相馬にも行っていただいたり、東京でも講演をしていただけるといいですね。少しでも多くの機会を通して、エル・システマの活動が広まることを願っています。本日は、どうもありがとうございました。

■世界大会期間中、シンポジウムⅣで
エル・システマの話題が取り上げられます。

3月30日（土）13:00 ～14:30　キッセイ文化ホール
「21 世紀におけるスズキ・メソードの歩むべき道」

テーマとして掲げたのは、「スズキ・メソードの基本教育理念の普及と世界への浸透」です。

◎パネリスト
石川成幸（駐日ベネズエラ・ボリバル共和国特命全権大使）
フランク・ディ・ポロ（ベネズエラ青少年のためのオーケストラ会長）
木下玲子（ジャーナリスト）
中嶋嶺雄（公益社団法人 才能教育研究会会長）
◎モデレーター
紿田英哉（公益社団法人 才能教育研究会常務理事）

※本誌 168 号、180 号でも石川大使とエル・システマの話題をとりあげています。